も決して愉しいことではない。

しかし待つておいで……私が死んだなら、過去の私よ、今の私よ——私たちは一しよにならう。さうして永遠に歸らぬ幽魂の世界に向つてひたすらに歩みを運んで行かう。

愛への道

あらゆる感情は愛に、情熱に歸することが能きる。嫌惡も、憐憫も、冷情も、尊敬の念も、友情も、恐怖も——また憎惡すらも。さうだ、あらゆる感情が……けれどただ一つの例外がある。即ち感謝の念である。

感謝は負債である。すべての人は自身の負債を返す……然も愛は——金ではない。

Fraza

私は巧言（フラーツァ）をおそれる、擯ける。しかも巧言を怖れることもまた——一つの衒氣（プレテンジア）である。

私たちの複雜な生活は Prétenzia と Fraza ——この二つの外國語の間を浮びただよつてゐるのである。

單純

單純よ！ 單純よ！ 爾（おんみ）をもつて人は神聖なるものといふ。しかも神聖なるものは——人の世の事ではないのである。

謙讓もまたさうである。謙讓は驕傲を抑壓し、驕傲を征服する。しかも忘れてはならぬ、征服感そのもののうちには既に驕傲のこころの潜むを。

波羅門教徒

波羅門教徒は、おのれが臍をうちながめ、「オム」の一語を復誦す。復誦することによりて神に近づく。

けれど人間の軀のうちにあつて、この臍ほど神聖でないものがあるであらうか？

この臍ほど、うつそみの果敢なさをはつきりと想ひ起させるものがあるであらうか？

おん身は泣きたまふ……

おん身はわたしの悲しみに涙を流す。私もまた、私を憫れんでくれるおん身に心を寄せて涙を流す。

けれどおん身はおん身の悲しみに自ら涙を流したのではなかつたか。おん身はただその悲しみを——私のうちに見出しただけのことである。

愛

すべての人はいふ――愛は最も神聖な、最も高邁な感情であると。爾の「自我」のうちに、他の「自我」が入りこんだ、爾は擴がり、毀れる、爾はたちまち遠くへ去つてしまふ。かくて爾の「自我」は死んでしまふ……

編者註……この詩は完結してはゐない。原稿にはこの後になほ數語つづいてゐるのであるが判讀し難い。

Nessun maggior dolore *

碧い空、柔毛のやうに輕い雲、花の芬香、若人の妙なる聲音、偉大なる藝術作品の輝かしい美、麗はしい女の顔に浮ぶ幸福の微笑と妖はしい雙の眸、……何のために、何のためにこれらのものはあるのであらう？

二時間おきに忌はしい、效能のない藥の一匙――いま要るものは、いま要るものは、ただそれだけだ。

*註……Nessun maggior dolore　いやまさる苦しみはあらじ
（ダンテ「神曲」、地獄篇、第五歌一二一）

眞理と眞實

『なぜ、あなたは靈魂不滅といふことをそんなに尊重するんですか。』と私は訊いた。

『何故ですつて？　さうすれば、永遠の、疑ふべからざる眞理をつかむことが能きるからです……それに、私の考へではここに最高の幸福があるといふわけです！』

『眞理を摑むといふことにですか？』

『勿論、さうです。』

『失禮ですが、あなたはこんな場面を想像することが能きますか？　數人の若者たちが集つて互ひに議論をしてゐる……そこへ、ふいと一人の仲間が入つ

て來る、ただごとならぬ眼つきをして、感激のあまり、息もつまりさうで、口もきけない位である。「どうしたんだ？　どうしたんだ？」「いや、諸君、聞いてくれたまへ、おれは何ていふ眞理を知つたのだ！　投射角は反射角に等しい。それからまだある、二點間の最短距離は直線だ！」

「ほんとかい！　ああ、何ていふ幸福なこつた！」と若ものたちは異口同音に叫ぶ。感激のあまり互に抱擁し合ふ！　といふやうな場面をです。」

『どうも僕はさういふ場面を想像できませんねえ！』

『あなたは笑つてらつしやる……だが無理もない話です。さういへば眞理は幸運を授けることは能きない……與へるのは眞實といふものです、幸運といふものは人間の、この地上の事ですからね……私は眞實のためには死をもいとひません。眞實のうへにこそ全生活が築かれてゐるのです、しかしどうしたら「それを摑む」ことが能きるのでせうか。それにまたどうしてここに幸福を見出したらいいのでせうか。』

鷓鴣

恢復の望みのない、永わづらひに疲れはてた私は、床についてゐて、考へた。これは何の報いなのか？ 何の因果で私は、この私は、こんな罰をうけるのか？ たしかに間違つてゐる、間違つてゐる！

稚い――二十羽ほどの――鷓鴣の一族が、刈株の茂みのなかに巣を營んでゐた。彼等は互に身を寄せ合ひ、幸福さうに、柔かい土の中にかたまつてゐる。にはかに犬がかれ等を驚かす。かれ等は一せいに飛び立つ。鐵砲の彈丸が飛ん

で來て翼を射たれ、すつかり傷ついた一羽の鷓鴣は墜ちる、苦しいながらも足を曳きずつて、苦蓬のしげみに身をかくす。

犬が探し廻つてゐる間に、この不幸な鷓鴣も、きつとかう思ふであらう、

『わたしのやうな鷓鴣が二十羽ゐた、……けれど、なぜこの私だけが、鐵砲に射墜されて、死ななければならないのか？ 何の報いで、ほかのきやうだいたちの前で、私はこんな憂き目を見るのか？ 間違つてゐる。』

病めるものよ、死の手がおまへを探し出さないうちは、横になつてゐるがよい。

車に轢かれて……

——その呻きごゑは何だ？

——私は苦しんでゐるのだ。ひどく苦しんでゐるのだ。

——小川の水が石にあたつて立てるざわめきを聞いたことがあるかね？

——ある……けどそれが一體どうしたつていふんだ？

——そのざわめきと君の呻きごゑが、同じ音だからさ、それだけの話さ。違ふところはただ、小川の水のざわめきは人の耳を樂しませることが能きるだらうけど、君の呻きごゑは何人の憫れみをもうけやしないだらうつていふんだ。君はその呻きを抑へちやあいけないよ、けど覺えておいで、これはみんな單なる音だ、打ち砕かれた樹の軋む音のやうに、……音……音に過ぎないんだ。

幼な兒の泣くこゑ

その頃は瑞西に暮してゐた。私は餘りにも若く、餘りにも氣儘に、餘りにも孤獨であつた。朝夕は重苦しく、怏々として慰むこともなく。何もしないうちから退屈し、やるせない心になつて、いらいらしてゐるばかりであつた。この世のなかのあらゆるものが、何の役にもたたない、はかないものに思はれた、——さうして、若いものにはよくあることながら、私も祕かに惡意をもつて、ひとつの考へに執著してゐた……それは自殺をねがふ心であつた。『突きとめて……復讐をしてやらう……』と私は考へた。けれど何を突きとめるのか？何に復讐をするのか、私にもわからないことであつた。ただ私の軀のうちに、血が、樽に詰められた葡萄酒のやうに沸き立つてゐただけであつた……この酒

は外に出してやらねばならぬ、それを抑へてゐる樹をうち割るべき時である……といふ風に考へられた……バイロンが私の神であつた、マンフレッドが私のヒーローであつた。

ある夜のこと、私はマンフレッドのやうに、あの氷河のはるか上の方の、人里遠く離れた山の巓に出かけて行かうと決心した。そこには草も木もない、ただ生氣のない巖石が累々としてゐる、物音はすこしも聞えない、瀧の音さへも耳には入らない！

一體そこで何をするつもりだつたのか……自分にもわからぬ……おそらく息を引き取るつもりででもあつたらう……

私は進んで行つた……

私は永いこと歩いた、初めは大きな道を、次には小徑を、いよいよ高く登つて行つた、――家や樹立が見えなくなつてからもう大分經つた……あたりはただ石ばかりになつた、間近な雪のはげしい冷氣が吹きよせてくる、けれど雪はまだ見えぬ。――眞黒な塊をなして夜の影がどこからともなしに押寄せてく

る。

つひに私は立ちどまつた。

何といふ怖ろしい靜寂だ！

これが死の王國だ。

此處では極度の悲哀と幻滅と輕蔑の念をいだいた、生きた人間といへば、私一人だけなのだ……私は浮世を逃れ、生きてゆくことを欲はない、ただ一人の生きた、意識のある人間なのだ。不思議な恐怖が私を凍らせてしまつた、けれど、私は自分を偉大な人間のやうに想像して見た！

マンフレッドのやうな――ただそれだけだ！

一人だ！　私は一人だ！　と繰返した。

死といふものに額をつき合はしてゐるただ一人の人間だ。もはや最後の時ではないか？　さうだ……最後の時だ。さらば、はかない世界よ。私はおまへを蹴飛ばさう。

すると丁度その瞬間に、急に私の耳に奇しげな、なかなか合點のゆかない、

しかも確かに生きた……人間の聲が忍び込んで來た、……私は驚いて、耳をすました……その聲は繰返して聞えて來た……さうだ、これは……これは子供のこゑだ、啼乳兒の泣きごゑだ……遠く、太古の昔から、浮世を離れてゐたやうに思はれてゐたこの空漠な荒れ果てた峯の上に、子供の泣きごゑ！……

驚愕は俄かに他の感情と入れ替つた、それは息もつまるばかりの歡喜の情であつた！　この叫びごゑを、弱々しい哀れな、救ひを求めてゐる泣きごゑをたよりに、私は足の趣くままに、墓地に馳けて行つた！

間もなく私の行手に、ちらちらと小さな灯影が耀き出した。私はなほも足を早めて――やがてひしやげた小舍を見つけ出した、石を積み重ねて、屋根に板をのせた……このやうな小舍はアルプスの牧人たちの、しばしの身の置きどころとなつてゐる。

私は半ば開いてゐる扉を推して、おづおづと小舍に入つて行つた、まるで死が私の後にのしかかつて來てでも居るやうに。

木椅子に腰をおろして、若い女が子供に乳をくれてゐた……夫らしい牧人が

並んで坐つてゐた。ふたりはさつと私を見つめる。けれど、私は何ひとつ言ふことも能きず……ただ微笑み、頭を振つてゐるばかりであつた……

バイロンよ、マンフレッドよ、自殺の夢よ、私の自矜よ、私の威勢よ、おまへたちは何處へ行つてしまつたのか！……

こどもは泣きつづけてゐた……私はその子を、その母親を、その夫を祝福した……

ああ、今の今、この世に生れたばかりの人の子の、もえつくやうな泣きごゑよ、おまへは私は濟つてくれたのだ！　私を癒してくれたのだ。

私の樹木

むかしの大學の友だちで、今は富裕な地主の貴族である男から手紙が來た、彼は自分の領地に私を招いたのであつた。

私は、彼が永いこと病氣で、失明して、身體が痲痺してしまつて、歩くことさへも能きないやうになつて居ることを知つた……私はさつそく出かけて行つた。

廣い庭園の或る並木路で私は彼に逢つた。夏だといふのに、毛皮の外套にくるまつて、瘦せこけて、猫背になつた彼は、眼のうへに綠色の光線除けをかけて、小さな手押車に乘つてゐた。華やかな仕着せを着た二人の召使が車を押してゐた。

――このわしの承け繼いだ土地、このわしの何千年を經た樹のかげに、あんたはよく來てくれましたねえ！　と、彼は死人のやうな聲でいふのであつた。

彼のうへには天幕のやうに、幾千年を經た槲の老樹が枝をさし擴げてゐた。

そこで私は考へた、『ああ、何千年を經た巨人よ、聽いてゐるかね？　おまへの根もとに蠢いてゐる死にかけた蛆虫は、おまへを自分の樹木と呼んでゐる！』

するうちにそよ風が、重なり合つた巨人の葉のかげを、音爽わやかに馳けぬけて行つた……年老いた槲の樹が、ものやさしい、靜かな微笑をもつて、私の情懷に――そしてまた病めるものの衿誇に應へたかのやうに思はれた。

目次

セニリア

田舎……九
會話……一四
老婆……一七
犬……二二
競爭相手……二四
乞食……二六
愚かしき者の審判を聽け……二八
處生法……三一

滿足してゐる人……三二
この世の終末……三四
マーシャ……三八
馬鹿もの……四一
東方傳奇……四四
二つの四行詩……四九
雀……五六
髑髏……五八
雜役夫と白い手の人……六〇
薔薇……六三
ユー・ペー・ウレフスカヤの思ひ出……六六
最後の邂逅……六八
おとづれ……七〇
NECESSITA—VIS—LIBERTAS……七四

施物……七六
蟲……八〇
スゥプ……八三
瑠璃色の國……八六
二人の富豪……八九
老人……九〇
通信員……九二
二兄弟……九四
エゴイスト……九七
神の饗宴……一〇〇
スフィンクス……一〇二
ニンフ……一〇四
敵と友と……一〇八
基督……一一一

巖……一一四
鳩……一一六
自然……一一九
明日こそは！　明日こそは！……一二二
絞罪にせい……一二四
いかばかり美はしく、鮮かなりしか、薔薇の葩は……一二九
航海……一三三
私は何を考へることであらう？……一三六
留れ！……一三八
高僧……一四〇
我等はなほも闘はう！……一四二
N・N……一四四
闘……一四五
祈禱……一四八

露西亜語……一五〇

未發表散文詩

雙生兒……一五三
奇遇……一五四
私はあはれむ……一五八
呪咀……一六〇
黒鶫……一六三
黒鶫また……一六六
塒もなく……一六八
杯……一七〇
誰の罪……一七一
處生訓……一七二
爬蟲……一七三

作家と評論家……………………一七四
『ああ、わが青春よ』……………一七六
……に………………………………一七七
私は高い山々の間を行くのであつた……一七九
私がこの世を去つたなら…………一八二
砂時計………………………………一八四
夜半に眼ざめて……………………一八六
ひとりでゐると……（分身）……一八八
愛への道……………………………一九一
Fraza…………………………………一九二
單純…………………………………一九三
波羅門敎徒…………………………一九四
おん身は泣きたまふ………………一九五
愛……………………………………一九六

Nessun maggior dolore……………一九七
眞理と眞實…………………………一九八
鷓鴣…………………………………二〇〇
車に轢かれて………………………二〇二
幼な兒の泣くこゑ…………………二〇三
私の樹木……………………………二〇八

ツルゲエネフ

散文詩

初版千三百部

昭和八年二月十五日印刷
昭和八年二月十八日發行

定價一圓八十錢

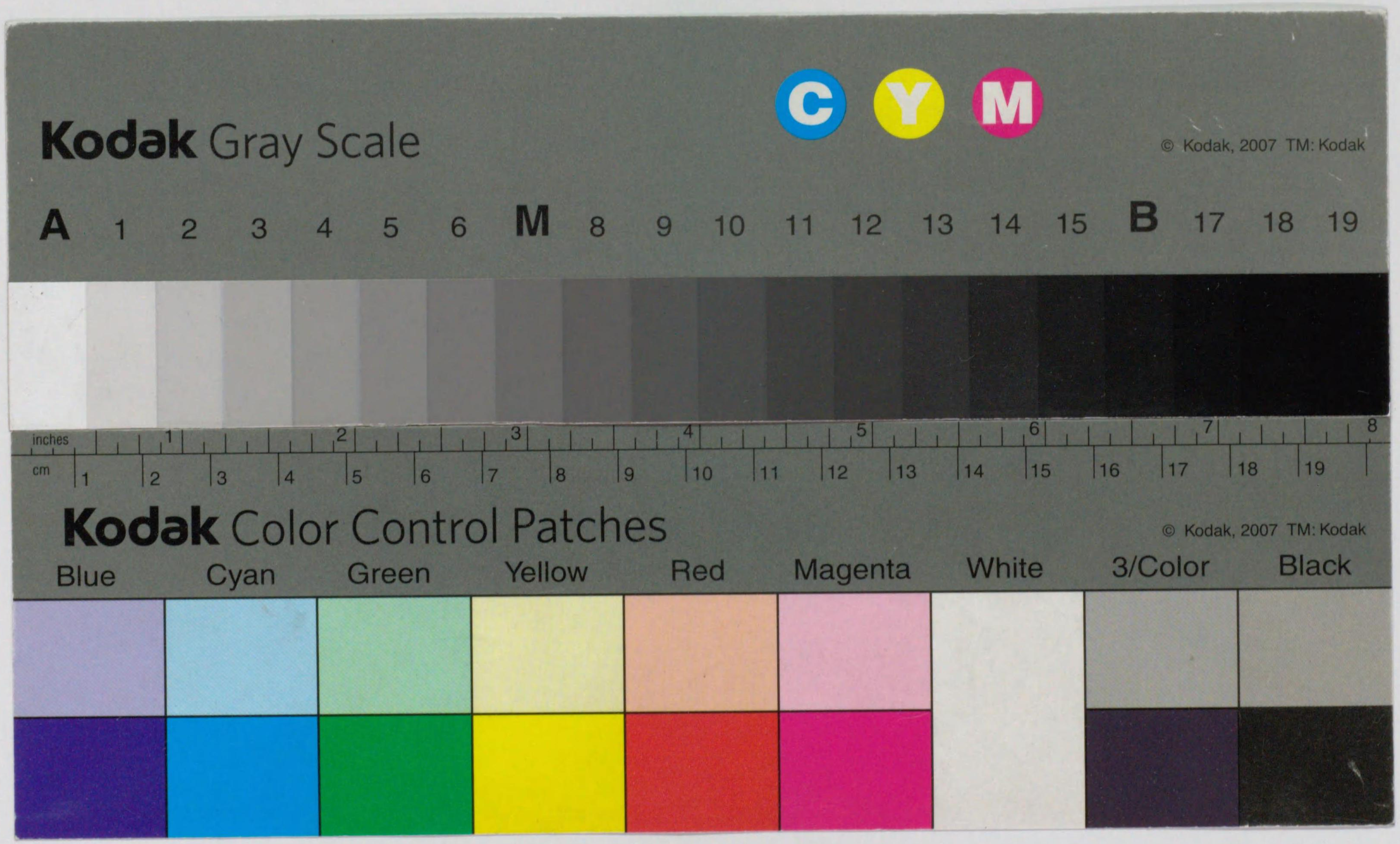
譯者　中山省三郎

刊行者　長谷川巳之吉

刊行所　第一書房
東京市麹町區一番町五
振替東京六四二二三
電話九段三三四四

印刷者　荻原芳雄
製本者　橋本久吉

569
425


Kodak Gray Scale
C Y M
© Kodak, 2007 TM: Kodak
A 1 2 3 4 5 6 M 8 9 10 11 12 13 14 15 B 17 18 19
inches
cm
Kodak Color Control Patches
© Kodak, 2007 TM: Kodak
Blue Cyan Green Yellow Red Magenta White 3/Color Black